‘極’早産児(在胎32週未満)の6歳までの身体発育の特徴

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 啓二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003616

DOHaD 研究（ISSN 2187-2597）
2019 年 第 8 巻 第 3 号　26 頁

‘極’早産児(在胎 32 週未満)の 6 歳までの身体発育の特徴

鈴木啓二[1]

1. 東海大学医学部専門診療学系小児科学

【背景・目的】

早産出生後は生直後におこる一時的な発育抑制とそれに引き続く発育促進（キャッチアップ）を特徴とする。本研究の目的は極早産児の 6 歳までの発育パターンの特徴を主に体格指標変化の観点から明らかにすることである。

【対象・方法】

対象は 2012 年に東海大学医学部付属病院で出生し NICU で入院管理され生存退院後外来で 6 歳までフォローアップされた在胎 32 週未満の早産児である。出生、3 歳、6 歳時点の体重(BW)、身長(BL)および BMI(BW/BL^2)と CI(BW/BL^3)について検討した。BW、BL は当該年齢、性別での日本人の標準値に対する Z スコア、BMI、CI は同標準値に対する相対値(%)について各時点での値および時点間の変化量との相関関係を検討した。

【結果】

生存退院した 39 名のうち 6 歳までのデータが得られたのは 23 名であった。BW、BL のキャッチアップは在胎 28 週以上の児では 3 歳までにほぼ完了していたが、在胎 28 週未満の児では停滞傾向であった。BMI、CI は在胎週数にかかわりなく 3 歳、6 歳時ともに低い傾向であった。出生より 3 歳までの変化量は BW、BL、BMI、CI すべて出生時の値と負相関していた。3 歳より 6 歳までの変化量は BW、BL では 3 歳時の値と負相関であったが、BMI、CI では 3 歳時の値との相関はなかった。

【結論】

体重と身長は 3 歳を過ぎても 6 歳までは修正へと向う発育傾向を示していたが、体格（多くは痩せ）の修正は 3 歳までであった。乳幼児期におこるこの特徴的な発育パターンに影響する因子やその成人期での体組成や健康事象に対する影響と意義について追跡していく必要があると思われた。